秋田大学での4，5年間

渡　辺　武　男　（地質・名誉教授）

1968年3月大学紛争の火が燃えたった頃に，定年で東大を去った。その頃すでに日本学術会議は政府に共同利用研究所としての固体地球科学研究所の設置を勧告しており，われわれは，それを名大に附置することを依頼していた。この設置問題に関連して，私は名大理学部へ再び勤めることとなった。ところが，紛争の焔は，名大へも拡がり，研究所設置問題は後廻しとなって3ヶ年の私の任期中には具体

化することもできず，今なお幻の研究所の儘である。そのうち名大で再度の定年を迎えることになったが，思いがけずも，秋田大学に呼ばれ，私にとって全く新しい生活が始った。そのお蔭で，「新制大学」の実態を内から見ることができ，日本の大学問題の複雑な様子を詳しく知ることができた。

わが国の国立大学は，現在総数81に達したが，その多くは昭和24年以后に出来た所謂　新制大学である。

秋田大学は，古く明治6年に創立された秋田伝習学校から続く秋田師範学校や，明治43年に創立された秋田鉱山専門学校（秋田鉱専）を統合して，昭和24年5月に，2学部から成る新制大学として発足した。前者は始め学芸学部と呼ばれていたが，後に教育学部と改称され，後者は鉱山学部となって，今日に及んでいる。

約5年前，秋田県の強い要望で，新しく医学部と附属病院とが，大学に設置され，併せて3学部となり，漸く総合大学の形態が整ってきた。

3学部の学生のための一般教育は，教育学部が担当しているので，教養部は持っていない。

教職員の総数は約1300，学生数は約3000で，比較的小規模の大学であるが，3学部3様で，各学部の組織構成などはそれぞれ全く異っており，簡単でない。

教育学部は課程制度をとっている。すなわち，(a)中学校・高等学校教員養成課程（中・高課程），(b)小学校教員養成課程（小学校課程），養護学校教員養成課程（養護学校課程），幼稚園教員養成課程（幼稚園課程）が設けられている。これらの課程を卒業したものは，教育学士と称することができ，その多くは，教員となる。中高課程のうち，特別の履修のしかたをしたものは，学芸学士と称することもできる。これらの人々は少数ではあるが，毎年若干名づつ卒業し，教員以外の分野へ進出している。

教育学部は課程の外に大学全体の一般教育をも担当しているが，教育学部に所属の学生は，それぞれ専攻によって，学生研究室に属し，専門科目の教育をうけ研究を行なう。この学部には，附属幼稚園・小・中・養護学校の4校がある。学部の教授・助教授・講師・助手は併せて約130名であり，それらの全員が教授会メンバーである。学生定員は4年制で1170名，今年は1学年320名を募集した。入学者の大多数は秋田県人で，女子学生の数は過半を越えている。過疎県の秋田では，現在卒業生の就職は，県内では困難で，多くの新卒は，東京・大阪・神奈川・千葉などの学校へ進出している。

この学部での教育と研究は，秋田県とのつながりが密なのが特長であろう。また，秋田師範学校時代からある多数の会員をもつ旭水会と呼ぶ同窓会は，今なお学部と密な連絡の下に活動している。

鉱山学部は，秋田鉱専の60余年の伝統を承け継いでおり，現在，採鉱・鉱山地質・冶金・金属材料・燃料化学・機械工学・電気工学・電子工学・土木工学の9学科よりなる。各学科は，修士課程をもつ大学院制の講座よりなり，鉱山学に関する研究と教育が中心となっている。しかし，最近は，電子工学科なども増設され，工学部的色彩も強くなり，鉱・工学部とも呼ぶべき内容が加わりつつある。

またこの学部には，3部門制の地下資源研究施設があり，外に，10余年前に，卒業生・業界などの寄付でつくった鉱業博物館も附置されている。教室定員は，教授から助手まで合せて100余名，学生定員は約1300名であるが，本年は1学年340名を募集した。試験場は秋田の外に東京にも設けてあり，全国的に学生を募集しているので，在籍者には県外出身の学生も少くない。また卒業生の就職も，全国的に分散している。秋田鉱専時代からの同窓会の北光会が，今も力強く学部を応援している。

医学部は，昭和45年4月に新設され来年3月に始めて卒業生を出す予定であり最も若い学部である。これは5～6年前秋田県の強い要望の下に設立された，講座制の学部である。近々大学院も設置されるであろうから，他大学の医学部と同様に，医学博士を送り出すスタンダードの医学部となるであろう。昭和46年に秋田県立中央病院が医学部に移管され，附属病院となった。現在新病院の建物を新築中である。そして昭和47年には看護婦養成の附属看護学校も附置され，学部は完成に近付きつつある。医学部の講座数は今基礎医学13，臨床15，計28で，30を目標としている。総学生定員は480名で今年は80名を募集したが，秋田県人で入学できたものは10％にも達しなかった。

以上は秋田大学の現状の概容である。そこでこの機会に新制大学の特長と悩みなどを若干述べて置きたい。

秋田大学は上記のように，規模としては余り大きくなく，教授総定員130余で，おそらく東大工学部より小さい。しかし乍らこの小さい大学の中に，制度的に内容の異る3学部があり，学内格差が目立つ。

最近，国大協や文部省などで大学格差の是正が叫けばれているが，なかなか解決しにくい問題である。

一方大学のある秋田市は今人口は約25万で，秋田の自然はまだ美しく保存され汚れも少ない。しかし，市が少しづつ発展して行くように，大学自身も発展を続けるであろうし，適正に延びる方策を考える必要がある。

秋田大学は，秋田が鉱業県であると云う特色を生かし乍ら，鉱山学部を力強く成長させることを怠ってはならないが，今后県の工業開発の進むにつれ，工学部的にも発展させて行くことも考慮すべきであろう。

それに，秋田大学には人文系の学部が不足しているので，今后２－３の新学部が加わり５学部位から成るバランスのとれた大学になるとよいと思う。そしてこの落着いた雰囲気で，よい研究を行い，素晴らしい成果が生れることを祈っている。

私自身は管理職の重荷に喘ぎ乍らこの4，5年を歩んできたが，新制大学のよさも，苦しさも具体的に知り得たことは貴重な体験であった。今の新制大学には，今なお制度的に不完全であり，その大学の中で，教育と研究に苦心を重ねている能力のある研究者も少なくないことを知ってほしい。

秋田大学は小さい大学であるだけに，職員・学生と接する機会も少なくなく，秋田駒ヶ岳・鳥海山へ登山し，岩石の標本を集めたり，時には共にスキーを楽しんだり，大学生活のよい想い出も少なくない。